

## 渡辺澄夫先生と私

甲 斐 素 純

四六

大学卒業間もない頃から、私は先生の自宅に出入りさせていただいた。先生は私の隣町（玖珠町）のご出身で、同じ玖珠郡内に生を受けたというだけで、私は勝手に先生を学問の師と仰いでいた。厚かましく先生の書齋に上がり込んで、専門書をあさり時にはそれらを借用し、先生から種々のご教授を戴いた。

先生は、人の話をよく聞かれた。「うん、うん。」と頷くのの良い事に、何でも遠慮なく申し上げた。先生は雑談の中から何らかのヒントを得られると、またご自分の調査・発見ではないものは、その著書や史料集に必ずその旨を明示された。たまにはあるが先生のご著書・史料集の片隅に、自分の名前が掲載される事が嬉しかった。

そんなことから、大分県外にある豊後国の荘園公領関係史料のコピーを、よく差し上げたものである。別府大学発行の渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』既刊十二巻は、まさに渡辺博士の日本史学に残した一大金字塔であり、あと補遺・索引を残すのみとなっていた。索引完成のあかつきの完成祝賀会までは、是非ともお元気でいてはしかつたと思うのは、私一人ではあるまい。

先生が亡くなられたと同じその一月末日が、『大分県地方史』第一六五号の原稿締切日でありそれに向けて私は、年末から「大友能直の三箇国守護」と題する原稿を書き始めた。能直の三か国守護職を証明する史料を見つけ、それをまとめた素稿が出来上がったので一月九日電話で先生に、私の考えの概略をお話した。先生は、「おおそうか。面白そうだな、ぜひ見せてくれ。」とのことであった。これが、私と先生との最後の会話であった。

私どもには計り知れない先生の高くて深い多くの業績の中から、その成果を少しでも吸収し生かせるように、これから『大分県地方史』に拙稿を一つ一つ発表する事が、先生に対するご恩返しの一端になるのではないかと考えている。